

滋賀県湖北方言の文法

平 澤 洋 一

1 はじめに

平山輝男先生を団長とする全国方言基礎語彙調査団は、昭和49年からの方言基礎語彙調査の一環として、近畿方言域で53年に南大和の十津川村、翌54年に南近畿の田辺市（紀伊中部）・新宮市（紀伊南部）・尾鷲市（南伊勢）および湖北の長浜市・高月町・米原町を臨地調査した。このあと55年、59年に湖北の単独補充調査を行った。本稿は、これらの調査資料に基づくものである。

いわゆる東西二大方言のうち、西部方言には下記(1)～(6)の文法事象が広く見られるが、滋賀方言や近畿中央部の方言には(6)は認められない。

- (1) 動詞サ行イ音便がある。
- (2) 動詞・形容詞のウ音便がある。
- (3) 一段動詞の命令形が-レ・-ロ語尾とならない。
- (4) 打消形に-ン・-セン・-ヤセンなどを用いる。
- (5) 断定の-ヤ・-ジャがある。
- (6) 進行態と結果態について、形態上の区別がある。

滋賀方言には、たとえば(a)湖東および湖西には、動詞意志形につく-ホン（例カコホン<書こう>）、仮定条件の-トサイガ（とすると）、尊敬・丁寧の-ナハルの命令形-ナイがある、(b)湖北には疑問を表す文末詞-ケはまず現れない、(c)湖南は動詞勧誘形につく-マイカ（例カコマイカ<書こうよ>）の用法に欠けるなどの地域差¹⁾がみられるようだが、いずれの方言も文法体系全般は近畿中央部の体系を基盤としている。

2 動 詞

1) 語形変化の形態と動詞の類別

長浜市方言（旧長浜）

動詞は後続形式の違いによって語形変化する。長浜市宮前町方言のカク（書）を例にとれば

(カタカナは音韻カナ表記, アクセントは省略), イヤヤサカイ カカヘン(嫌だから書かない),
オトトニ カカシタル (弟に書かせてやる), トシ トツテモ ヒトリデ カキナハル (年をと
っても一人でお書きになる), イマ カイトル (今書いている), ワシャー ゼツタイニ カキャ
ーセン (私は絶対に書きはしない), オマエモ カクカ (お前も書くか), アノヒトガ カクンナ

表1 長浜市方言動詞活用表

類	活用形		第1形	第2形	第3形	第4形	第5形	第6形	第7形	
	語基									
I 類	1	書 kak- ka'-	a	i		u	e	o	o(E)	
	2	漕 kog- ko'-	a	i	i	u	e	o	o(E)	
	3	出 das-	a	i	i	u	e	o	o'(E)	
	4	立 tac- ta-	a	i		u	e	o	o(E)	
	5	借 kar- ka-	a	i	Q	u	e	o	o(E)	
	6	飛 tob- to-	a	i	N	u	e	o	o(E)	
	7	読 'jom- 'jo-	a	i	N	u	e	o	o(E)	
	8	死 sin- si-	a	i	N	u	e	o	o(E)	
	9	拾 hira'- hiro-	wa	i	E	u	e	o	o(E)	
	10	'os-	e		i	u				
II 類	1	見 mi-	φ	φ	φ	ru	'jo	'jo	'jo(E)	
	2	寝 ne-	φ	φ	φ	ru	'jo	'jo	'jo(E)	
	3	来 ki- ko- ku-	φ	φ	φ		E	'i	'jo*	
	4	為 si- se- sa- su-	φ	φ	φ	ru	E	'jo	'jo(E)	
主な 後続形式			-N	-ta'i	-ta	言い切り	(命令)	-ma'ika	(意志)	
			(打消)	(願望)	-da	体言		(勧誘)		
			-heN	-hazimeru	(過去)	-'jaroE				
			-seN	(始動)	-teru	(推量)				
			'jahex		-deru					
			(強い打消)		-taru					
			-su		-daru					
			-sasu		(継続・結果)					
			(使役)		-tara					
			-nsu		(仮定条件)					
-'ja:nsu										
(親愛)										
-haru										
(やさしさ・上品)										

(注) * = 稀にしか現れない。

ラ ワシモ カコホン (あの人が書くなら私も書こう), ハヨ カカンセー (早く書きなさい),
 ミンナデ イッシヨニ カコマイカ (皆で一緒に書こうよ) といった語形変化をする。このよ
 うな諸形式から活用形を抜き出し, 他の動詞についても同様の手続きを加え, 動詞の類ごとに活
 用を示すと表1のようになる。

この方言の動詞は, 語基末尾が子音音素で終わるⅠ類と, 母音音素で終わるⅡ類とに分けら
 れ, 末尾音素および活用形態によりⅠ類は10種に, Ⅱ類は4種に細分類される。各類の主な所属
 動詞は, 次のとおりである。

Ⅰ類動詞

- (1) 末尾子音が-k——カク kak-u (書く), サク sak-u (咲く), イク 'ik-u (行く), アルク
 'aruk-u (歩く) ……
- (2) 末尾子音が-g——コグ kog-u (漕ぐ), ユスグ 'jusug-u (ゆすぐ) ……
- (3) 末尾子音が-s——ダス das-u (出す), カス kas-u (貸す), ユルス 'jurus-u (許す), ホ
 カス hokas-u (捨てる) ……
- (4) 末尾子音が-c——タツ tac-u (立つ), マツ mac-u (待つ), モツ moc-u (持つ) ……
- (5) 末尾子音が-b——トブ tob-u (飛ぶ), アサブ 'asub-u (遊ぶ) ……
- (6) 末尾子音が-m——ヨム 'jom-u (読む), ノム nom-u (飲む) ……
- (7) 末尾子音が-r——kar-u (借りる), タル tar-u (足りる), アル 'ar-u (有る), フル hur
 -u (振る), ケル ker-u (蹴る) ……
- (8) 末尾子音が-n——シヌ sin-u (死ぬ), イヌ 'in-u (帰る)
- (9) 末尾子音が-'——ヒラウ hira'-u (拾う), カウ ka'-u (買う), イウ 'i'-u²⁾ (言う), ワ
 ラウ 'wara'-u (笑う) ……
- (10) 特殊動詞——オス 'os-u³⁾ (ございます), ワス 'was-u (いらっしゃる), ゴンス gonS-u
 (来なさる) ……

Ⅱ類動詞

- (1) 末尾母音が-i——ミル mi-ru (見る), キル ki-ru (着る), オキル 'oki-ru (起きる),
 ワビル 'wabi-ru (詫びる) ……
- (2) 末尾母音が-e——ネル ne-ru (寝る), タベル tabe-ru (食べる), デル de-ru (出る) …
 …
- (3) 末尾母音が-i~-o~-u (-i, -o, -u の母音交替) ——クル ku-ru (来る)
- (4) 末尾母音が-i~-e~-a~-u——スル su-ru (為る)

長浜市方言では「借りる」「足りる」が五段化してカル, タルとなるほか, オス, ゴンス, イ
 スのような特殊動詞がみられるが, 同じ近畿周辺部であっても南近畿などに見られるオクル (起
 きる), スグル (過ぎる) のような二段活用の残存や, 「見る」「寝る」の五段化などは観察さ

れない。

動詞オル(居)は、近畿中央部と同様に卑語化していて劣勢である。イヌガ オル(犬がいる)のように動物には用いても、日常場面で人間には一般に用いず、イルを使う。これは旧長浜地区だけでなく、^{かみてる}神照、^{きたごうり}北郷里、^{なんごうり}南郷里、西黒田、伊香郡高月町なども変らないが、坂田郡米原町^{くれ}樽ヶ畑方言では、卑語化の程度は弱い。

表1にみる動詞と後続形式の承接については、若干の説明を要する。第1形の後続形式の一つである-Nsu・-'jaNsu(親愛)であるが、力変はコンス ko- ϕ -Nsu、キヤンス ki- ϕ -'jaNsu またはキヤンス kjaNsu となる。サ変はサンス sa- ϕ -Nsu またはシヤンス si- ϕ -'jaNsu となる。打消しの-ンは、カ変はコ-, サ変はセ-に承接する。受身については、カ変はキラレル ki- ϕ -rareru, コラレル ko- ϕ -rareru, サ変はシラレル si- ϕ -rareru, セラレル se- ϕ -rareru, サレル sa- ϕ -reru のいずれも使われる。

第6形に承接する禁止の-ナの場合、一段動詞では、下記のように二つの形が現われるが、語尾に-ru-のある形式が劣勢である。

答えるな	kota'e- ϕ -na	kota'e-ru-na
始めるな	hazime- ϕ -na	hazime-ru-na
忘れるな	'wasure- ϕ -na	'wasure-ru-na
見るな	mi- ϕ -na	mi-ru-na
着るな	ki- ϕ -na	ki-ru-na
居るな	'i- ϕ -na	'i-ru-na
出るな	de- ϕ -na	de-ru-na

第8形にみるやさしい命令の-ヤ・-イヤは、一般に男性が用い、同等以下の相手に強い親しみをこめてやさしく命令する時に使われる。I類動詞にもII類動詞にもつく。ヨメヤ・ヨメイヤ(読みなさいよ)、カレヤ・カレイヤ(借りなさいよ)、オキヤ・オキーヤ(起きなさいよ)、ネヤ・ネイヤ(寝なさいよ)、コイヤ・キーヤ(来なさいよ)、セイヤ・シーヤ(しなさいよ)…。カ変はキヤイ、サ変はシヤイも稀に。この-ヤイは、湖東方言や湖西方言にみられる親しみのこもった命令を表す-ヤイと同系で、-ヤハルから変化したヤルの命令形であろう。

一方、やさしく上品な-ナハルの命令形-ナイを用いた親しみのある命令表現も集落により使われる。カキナイ(書)、ミナイ(見)、キナイ(来)など。これは、大人が自分の子や近所の子供などにやさしくいうときなどによく用いる。

伊香郡高月町方言

共通語で上一段の「借りる」「足りる」が五段化(坂田郡米原町方言なども同様)し、下一段「捨てる」には、長浜市方言と同じく、五段動詞ホカス(坂田郡米原町方言ではホカル)が対応している。また、長浜市方言で見た特殊動詞オス(ございます)が使われるなど、近畿方言らし

いくつかの特徴をそなえてはいるが、打消の-ヘン・-ヤヘンや禁止の-ナが承接する場合、あるいは假定表現の形式などの面で、長浜市方言とは差異がある。

高月町熊野方言の動詞の活用表を表2に示す。各類の所属動詞は、長浜市方言と比べ大きな差はない。しかし、カ変・サ変動詞と後続形式との承接は、長浜市方言のそれとは若干異なる。つ

表2 伊香郡高月町方言動詞活用表

類	活用形		第1形	第2形	第3形	第4形	第5形	第6形	第7形	第8形	第9形	第10形	
	語基												
I 類	1	書 kak- ka'-	a	a	i		u	u	ja	e	o	o(E)	
	2	漕 kog- ko'-	a	a	i		u	u	ja	e	o	o(E)	
	3	出 das- da'-	a	a	i		u	u	ja	e	o	o(E)	
	4	立 tat- tac- ta-	a	a		i*					e	o	o(E)
	5	借 kar- ka-	a	a	i		u	u	ja	e	o	o(E)	
	6	飛 tob- to-	a	a	i		u	u	ja	e	o	o(E)	
	7	読 'jom- 'jo-	a	a	i		u	u	ja	e	o	o(E)	
	8	死 sin- si-	a	a	i		u	u	ja	e	o	o(E)	
	9	拾 hira'- hiro-	wa	wa	i		u	u	ja	e	o	o(E)	
	10	'os-	e			i	u						
II 類	1	見 mi-	φ	E	φ	φ	ru	φ~ru*	rja	'jo~E	'jo	'jo(E)	
	2	寝 ne-	φ	E	φ	φ	ru	φ~ru*	rja	'jo~'i	'jo	'jo(E)	
	3	来 ki- ko- ku-	φ	E	φ	φ		φ	ja	φ			
							ru		rja	'i	jō	'jo(E)	
	4	為 si- se- sa- su-	φ	E	φ	φ		φ	ja		'jo	'jo(E)	
主な 後続形式			-N	-hen	-ta'i	-ta	言い切り	-na	(假定)	(命令)	-ma'ika	(意志)	
			(打消)	-sen	(願望)	-da	体言	(禁止)		-'ja	(勧誘)		
			-nsu	(強い打消)	-masu	(過去)	-nara			-i'ja			
			-'jansu		(丁寧)	-tara	(假定条件)			(やましい命令)			
			(親愛)		-hazimeru	(假定条件)	-'jaroe						
			-reru		(始動)	-teru	(推量)						
			-rareru		-na'i	-toru							
			(愛身)		(覗みのゆる命令)	(継続・結果)							
			-su										
			-sasu										
(使役)													
-haru													
(やれよ上副)													

(注) * = 稀にしか現れない。

まり、打消しの-ンがカ変に続く場合はコン、サ変ではセン、強い打消しのヤヘンが続く場合は、カ変はキヤヘン、サ変はシヤヘンとなる。使役の-ス・-サスは、カ変はコサス（優勢）・キサス（劣勢）、サ変はサスとなる。また、親愛の-ンス・-ヤンスはカ変でキヤンス、サ変ではサンスとなる。

やさしさ・上品さを表す-ハルは、動詞の第1形につくのが原則。ただし動詞によっては語基につくこともある。第1形につくものと語基につくものが併用される動詞では、後者が優勢である。

言う	ユハル	ユワハル
食う	クハル	クワハル
思う	オモハル	オモワハル

-タル・-ダルは継続態にも結果態にも用いるが、動詞により若干の差があり、結果態としてのキタル（着）、デタル（出）、キタル（来）、シタル（為）などはほとんど用いず、-テルを使うようである。

「食べる」の過去形はクタ ku-φ-ta と短音化するが「行った」は 'i-q-ta で、「居た」'i-φ-ta と対立する。

第6形につく-マイカは、サ変に承接する場合にはショーマイカも安定している。カ変への-マイカの接続は、きわめて稀である。

坂田郡米原町樽ヶ畑方言

高月町の動詞活用と大きな差がないので活用表は略し、主な相違点を示すにとどめる。樽ヶ畑方言では、打消しを表す形式は-ンおよび-ヘン・-セン・-ヤヘン・-ヤセンであるが、ミル、キル（着）、デル、クル、スルなどの動詞には-ン、-ヤヘン両形の接続がみられ、かつ安定している。カ変はコン・キヤヘン、サ変はセン・シヤヘンである。このほか承接面の特徴としては、-ハルと-マイカに触れておかねばなるまい。やさしさ・上品さを表す-ハルはI類動詞にもII類動詞（カ変を除く）にもつくが、II類にはヤハルが多いようである。勧誘のマイカがカ変に接続する用例は現れなかった。

次に、カ変の命令形はコイおよびキー、サ変はセヨおよびセーであり、キー・セーは女性に多い。このほか、ハヨ イキ、チョット マチーといった連用命令法や、連用形に-テ・-デを添えたモー オキテ、ハヨ ノンデなどのやさしい命令表現もよく使われる。

2) 音便

長浜市方言に現れる動詞の音便形は、ア音便、イ音便、ウ音便、撥音便、促音便、それに短音便の6種である。

(1) ア音便¹⁾——カータ（書）、ナータ（泣）……

(2) イ音便——フセイダ（防）、オヨイダ（泳）、ヌイダ（脱）、オトイテ（落）、サイテ（差）

……

- (3) ウ音便——モータ (舞), ウトータ (歌), コータ (買), オータ (会), ヒロータ (拾), オモータ (思) ……
- (4) 撥音便——トンダ (飛), ヨンダ (読), アスンダ (遊), ノンダ (飲) ……
- (5) 促音便——マッタ (待), ノッタ (乗), イッタ (行), カッタ (借), タッタ (足), トッタ (取), ウッタ (売) ……
- (6) 短音便——クタ (食), オモタ⁵⁾ (思), ヒロタ (拾) ……

ア音便は、旧長浜のほか神照、北郷里でも観察された。サ行イ音便は、北郷里および南郷里の一部の集落の70才以上の高年層にみられたもので、市街地を中心にほとんど残存しなくなつてきている。

高月町方言ではイ音便、ウ音便、撥音便、促音便および短音便の5種で、サ行イ音便は大字馬上で観察された程度である。米原町方言には、ア音便もサ行イ音便も、さらには短音便も現れなかった。

3 形 容 詞

1) 形容詞の種類と活用

「高い」を例にとると、長浜市宮前町方言ではタカイサカイ ヤメトク (高いからやめておく), アンマリ タコーテ カエンワ (あまり高く買って買えないよ), ソレワ タコオス (それは高うございます), タカイトサイガ イーンヤガ (<もっと>高いというの良いのだが), アレワ タカカロナー (あれはくさぞ>高かろうなあ) のような語形変化がみられる。現れるすべての形式から活用形をとり出し、他の形容詞についても活用をまとめると、表3のようになる。

語基末尾の母音音素を基準に分類すると、長浜市宮前町方言の形容詞は、次の5類に分かれる。

- (1) 末尾母音が-i——ウツクシー 'ucukusi-E (美), ウレシー 'uresi-E (嬉) ……
- (2) 末尾母音が-a——サブシナイ sabusina-'i (淋), イカイ 'ika-'i (大) ……
- (3) 末尾母音が-o——シロイ siro-'i (白), ヒロイ hiro-'i (広) ……
- (4) 末尾母音が-u——アツイ 'acu-'i (暑), ウスイ 'usu-'i (薄), ウイ 'u-'i (憂) ……
- (5) 末尾母音が-i~e——エー 'e-E~イー 'i-E (良)

ウイ (憂) は多義語である。「①恥ずかしい」とか「②物憂い」の意で使われるほか、アノコワ ウイコヤナー (あの子は可愛らしい子だなあ) のごとき「③可愛らしい」、物をもらって丁寧にお礼を述べる時などに使う「④申し訳ありません、恐縮です」の意味もある。

2) 活用と後続形式

表3 長浜市方言形容詞の活用

類	語基	活用形	第1形	第2形	第3形	第4形	第5形
1	美	'ucukusi-	karo(ɛ)	kaɔ	ϕ	ɛ	kerja*
		'ucukusju-			ɛ		
2	高	taka-	karo(ɛ)	kaɔ		'i	kerja*
		tako-			ɛ~ϕ		
	無	na-	karo(ɛ)	kaɔ		'i	kerja*
		no-			ɛ~ϕ		
		sabusina-	karo(ɛ)*	kaɔ		'i	kerja*
淋	sabusino-			ɛ~ϕ			
	sabusi-			ϕ			
3	白	siro-	karo(ɛ)	kaɔ	ɛ~ϕ	'i	kerja*
4	暑	'acu-	karo(ɛ)	kaɔ	ɛ~ϕ	'i	kerja*
	憂	'u-				'i	
'ue-ɛ		karo(ɛ)	kaɔ	ϕ			
5	良	'e-				ɛ	
		'i-				ɛ	
		'jo-	karo(ɛ)	kaɔ			kerja*
主な 後続形式			-ga	-ta	-naru	言いきり	(仮定)
			(逆接条件)	(過去)	(~なる)	体言	
				-tara	-'osu	-saka'i	
				(仮定条件)	(ございます)	(理由)	
				-ta'jaro(ɛ)	-te	-rasiɛ	
				(過去推量)	(接続)	(伝聞推量)	
		-temo	-'jaro(ɛ)				
		(逆接)	(推量)				

(注) * = 稀にしか現れない。

表3の第1形にみる karo(ɛ)は、アカカローガ シロカローガ (赤かろうが白かろうがく構わない) のような文脈には、安定して現われる。

第2形に丁寧のオス (ございます) が承接する場合には、一般に短呼化し、ナル (~なる) ・ -テ (接続) ・ -テモ (逆接) のつく場合も短呼化することがある。オスは、旧長浜のほか南郷里、高月町でも観察され、承接は旧長浜と変らないが、高月町方言では伝統的なドスが併用され、アマイドス (甘)、サブシナイドス (淋) などという。このドスは丁寧な断定を表し、オスとは違って、形容動詞語幹や体言にもつく。

表3の第3形は、ウツクシー (美) ・ タノシー (楽) など、語基末尾が-iの場合には、ウツクシューナル、タノシューナルのように融合するが、-テ ・ -テモなどが承接するときには、ウツクシテ、タノシテともなる。

第5形による仮定表現は、あまり使われず、タラやナラが多用される。そして、高月町方言や米原町方言にいたると、一般に第5形は現れなくなる。

なお、高月町方言では、ナイ（無）がナルに接続するときはノーナルとなるが、サブシナイ（淋）はサブシノーナルとはいわず、サブシナルとなる。仮定表現でもナイがナカッタラとなるのに対し、サブシナイはサブシカッタラとなる。

4 助動詞類

1) 使役

長浜市方言、高月町方言、米原町方言のいずれにおいても、近畿中央部や南近畿などと同様に -ス・-サスで表現する。サ変動詞に下接するときにはサス、シサス、セサス、イヌ（帰る）に続く場合にはイナス、イナサスのどちらも現れる。つまり、サ変⁶⁾やイヌには-スも-サスも接続する。

使役の打消しには、ヨマサン（読）、ヨマセン（同）のように-サンと-センの両形が使われる。

2) 受身、可能

可能表現に可能動詞を使うことが多いことから、-レル・-ラレルは受身だけを表す方向に変化しつつあるようだ。

能力可能の打消しと条件可能の打消しではいい方に差があり、この点でも近畿中央部方言などとの共通面をもつ。「<生まれつき>泳がれない」のような能力可能の打消しは、3地点ともヨー オヨガンという（長浜市方言でオヨゲン・オヨガレヘン、高月町方言でオヨガンセン、米原町方言でオヨゲン・オヨガンセンが併用されるが、いずれも劣勢）。

「プールがないので泳がれない」のごとき条件可能の打消しは、長浜・米原でプールガ ナイサカイ オヨガレン、高月でプールガ ナイサカイ オヨゲンがよく使われる。

3) 打消し

3地点とも-ン、-ヘン、-ヤヘンなどが観察されるが、打消しの強さに方言差がある。京都市方言や高月・米原などでは-ヤセン・-ヤヘンが強い打消しを表すのに対し、旧長浜では、これらが-ンよりやや強い打消しを表す程度で、-セン・-ヘンがより強い打消しを表すことが少なくない。

接続面では、長浜市方言の2拍の1段動詞およびカ変・サ変に特色があり、これらの動詞に-セン・-ヘンが承接する場合に、一般に長音化し、「見ない」はミーセン、ミーヘン、「着ない」はキーセン、キーヘン、「居ない」はイーセン、イーヘン、「来ない」はコーセン、キーセン、コーヘン、キーヘン、「しない」はシーセン、セーセン、シーヘン、セーヘンとなる。これに対

し高月・米原では、長音化せずに-ヤセン・-ヤヘンの続く形が安定している。

4) 推量

推量を-ヤロ（だろう）、伝聞推量を-ラシー（らしい）、打消推量を-マイ（まい）ないしは-ンヤロ（ないだろう）などで表し、近畿一般と変らない。

-マイには、ちよっと変わった使われ方がみられる。死にかけている病人に対して「だめだろう」というときなどのいい方にアコマイがあるほか、ヨー カコマイ（書けまい）、ヨー セマイ（できまい）、ヨー コマイ（来られまい）のようないい方があり、3地点とも可能推量の打消しを表す。打消し意志にもマイが使われるが、推量の打消しとは接続が異なる。つまり、打消し意志では、いわゆる五段動詞の終止形、一段動詞の未然形に続くのに対し、推量の打消しでは五段や一段動詞の未然形に接続する。

5) 過去, 完了, 断定, 願望

過去を-タ・-ダ、完了を-タ・-ダ・-テマウ（てしまう）・-デマウ、断定を-ヤ・-ジャ、願望を-タイ・-タガルなどで表す。このうち-ジャは長浜および米原の老年層でやや使われる程度で、湖北はもとより滋賀県全域で-ヤの勢力が強い。-ジャを使わない地域も多い。

丁寧体の断定には長浜市・高月町で-デスと-ドス、米原町で-デスが使われる。-ドスは京都系である。高月町の-デスは劣勢。

6) 様態, 比況, 伝聞

様態を-ミタイナ（みたいだ）・-ヨーナ（ようだ）・-ソーナ（そうだ）、比況を-ミタイナ・-ヨーナ、伝聞を-ソーナ・-ホーナ・-ホナ・-ゲナなどで表す。これらは、-ホーナ以下を除き長浜市および米原町でヤ語尾およびジャ語尾が、高月町ではヤ語尾が併用される。-ホーナ・-ホナはほとんど勢力を失いつつあり、高月町方言には現れなかった。また、-ホーナ・-ホナ・-ゲナが接続する場合の上接語の活用形は、上記他の形式と変らない。-ゲナは老年層ではまだ結構使われるが、中年層以下ではあまり使われず、『近畿方言の総合的研究』205頁に報告されたような状態にある。

7) 尊敬, 丁寧, 軽蔑

尊敬表現からみていく。長浜市方言では、-ナサル、-ナハル、-ヤハル、-ヤール、-アール、-ハル、-アル、-サツシャル、-ツシャル、さらには特殊な待遇用法をあわせもつ-レル・-ラレルなどの諸形が用いられている。待遇度は、おおむね-ナサル、-ナハル、-ハル、-ツシャルが高く、-ヤハル、-ヤール、-アールなどは低いようである。

アノヒトガ タベル(あの人が食べる)というような敬卑面で中立的な文に対し、やや待遇度の高い「あの人が食べられる」レベルでは、タバナサル、タバナハル、タベハル、タバヤハルなどが使われるが、-ヤハルを除くと劣勢で、より待遇度の高い「あの方がお食べになる」あたりから上の表現によく使われる。-ヤハルや-ヤールは単なる尊敬ではなく、聞き手あるいは話中の人物との親愛をも含んだ表現である。上記-アル・-ヤール・-アールは-ハル・-ヤハルの訛音形である。一方、-ハルが-ハール [ha:ru]、-ヤハルが-ヤハール [jaha:ru] となることもある。これら-ハル・-ヤハル系は、いわゆる未然形接続であり、連用形接続の大坂方言などとは異なる。

これらに勢力を奪われて使用が稀になったものの、文語系の-ラルも残存し、オキヤクサンガキテラル (お客様が来ていらっしゃる)、テガミオ カイテラル (手紙を書いていらっしゃる) などという。

特殊な用法の-レル・-ラレルというのは、話中の人物が話し手より目上の家族・親族などで、かつ聞き手が話し手より目上の場合に使われる-レル・-ラレルであって、たとえば若年層の話者が自分の親のことを隣人にイツモ オヤガ オセワニナツテイラレマシテ (いつも親がお世話になっていました) と挨拶するなどの例が、旧長浜で観察された。この種の表現は、他の地域では現れなかった。また、『近畿方言の総合的研究』190頁に報告されたような、話中の人物が話者より年下の家族・親族の場合の-レル・-ラレルの使用は、長浜市方言 (旧長浜、神照、北郷里、南郷里、西黒田)、高月町方言 (馬上、熊野、雨森)、米原町方言 (樽ヶ畑) のいずれにも認められなかった。

次に、高月町方言の尊敬表現には、-ナサル、-ハル、-アル、-ヤハル、-ヤール、-アールが使われる。訛音形の-アル、-ヤール、-アールは、これまで伊香郡を除く湖北方言の現象とされてきた (『近畿方言の総合的研究』189, 193頁) が、今回の調査で、伊香郡の一部にもあることが分かった。新しい変化形である。

米原町方言では-ナサル、-ハル、-ヤルおよび文語系の-ラルが使われる。この-ラルは古形で、動詞に直接または-テ・-デを介して接続する。後者は、あるいは一部は-テや・-デのあとの要素の省略形であろうか。

トラル (取られる)、オキラル (起きられる)、シラル (しられる) ……

カイテラル (書いていらっしゃる)、ヨンデラル (読んでいらっしゃる)、ユーテラル (言っていたらっしゃる)、ミテラル (見ていらっしゃる) ……

もう一つ、米原町方言に見られた独得の形式に-ヤルがある。アノセンセイワ ヨー ミヤル (あの先生は上手に診察なさる) とかシヤル (しられる) のようにいい、同等以上の人の動作に用いる尊敬表現である。

3地点とも、丁寧表現に-マス、丁寧・親愛表現に-ヤス・-ヤンス・-ンスが使われる (米原町では稀)。五段動詞に-ンス、一段動詞に-ヤンスの接続するのが原則ながら、イキヤンス、ヨミ

ヤンスなど五段連用形への-ヤンスの接続もみられ、力変はコンス、キヤンス、サ変はサンス、シヤンスの併用。融合することもある。

米原町^{さめがいくれ}醒井^{はた}樽ヶ畑方言では、古形タモルの残存も確認できた。ミテタモレ(見てください)、ミテタモタ(見てください)といった使い方をし、丁寧な依頼表現にはミテタエ(見てください)、オカシ タエナ(お菓子をください)のような-タエ(-タイとも)も併用される。-タイのほうは、犬上郡で用法の安定している形式であるらしい。

軽蔑・卑蔑表現に-ヨル、-トル、-サラス、-ヤガル、-クサル、-テケツカルなどが使われる。-ヨル・-トルが卑蔑化しているのは近畿中央部と同様の現象である。この-ヨル・-トルは、-サラス、-ヤガル、-クサル、-テケツカルほどには軽蔑・卑蔑が強くない。これは3地点とも、そうである。卑蔑度のきわめて高いのが、-クサルと-テケツカルである。長浜市方言で、カキヨル・カッキヨル・カッコル(書)、シニヨル・シンニヨル・シンノル(死)、トビヨル・トンドル・トッポル(飛)などの形が観察されたが、カッコル、シンノル、トッポル類は高月町でも米原町でも、ほとんど現れなかった。

8) 継続, 結果

米原町醒井のように、イマ ヨミヨル(今読んである)、モー ヨンドル(もう読んでいる)、サカナ シニヨル(魚が死にかけている)、モー シンドル(もう死んでいる)といった使い分けを残す集落もあるものの、これを除くと、進行態と結果態の、形式による区別はみられなかった。

結果存続の「てある」に対応するのは3地点とも-タ(-)ル・-ダ(-)ルであり、与益を表す「てやる」も同形である。また、これらの過去表現は-タッタ・-ダッタとなる。

5 助 詞

1) 格助詞

旧長浜、神照、北郷里、南郷里、西黒田、伊香郡高月町、坂田郡米原町で調査を行ったが、主語や対象を表す助詞は-ガであり、近畿中央部と変らない。-ガは省略されることもある。連体修飾構造のなかでは、共通語と同様に-ノであり、-ンは認められなかった。

-オが目的や経由点を、-ニが相手、方向、場所、結果、-エが方向、場所などを表す。-ニは、長浜市方言ではオトナン ナラハッター (大人になりましたねえ)、ツレン ナッテナー (仲間になってね)などの文脈では、-ンも観察された。

手段・原因の「で」はデ、共同の「と」は-ト、比較の「より」は-ヨリであって、3方言とも共通語の用法と特に差はない。

2) 係助詞、副助詞

3方言とも特説の「は」は-ワ、共説の「も」は-モである。「こそ」は-コソだが、高月町では-ワ（は）が下接する場合には、融合することもある。-コソは米原町樽ヶ畑方言では、ソレコサレ（そのことだよ、注意したとおりでらう！）のような係り結びの残存が一部の話者に観察された。この～コサレは、『近畿方言の総合的研究』では滋賀県で甲賀郡、三重県では伊賀にあると報告された形態である。今回の調査で、滋賀県の坂田郡の一部にも残存していたことが分かった。

限定を表す「ばかり」には-バカリ、「だけ」に-ダケ、「きり」に-キリ、「さえ」に-サエ、「だつて」に-ダツテがおおむね対応する。用法も3地点ともほとんど変わらない。一般に「たつた一本しか残っていない」のような「しか」には-ホカ・-ヨリが対応し、タッタ イッポンホカ ノコッテナエ<長浜>、タッタ イッポンヨリ ノコッテヘン<高月>などという。

程度を表す助詞も地域差がほとんどないようで、おおむね距離的程度を-ホド・-パカリ、量的程度や程度比較を-ホド、近似的程度を-グライで表す。

3) 接続助詞

仮定の-パは、長浜市方言ではカキヤ（書けば）、ミリヤ（見れば）、クリヤ（来れば）のような融合形が安定しているのに対し、他の2地点ではほとんど観察されなかった。一方、仮定条件の「たら」は-タラ、「なら」は-ナラで、この点も近畿中央部と変らない。

逆接も同様で、-テモ（ても）、-カテ（ても、たつて）、-ケンド・-ケド（けれど）、-ノニ（のに）がよく使われる。

原因・理由を表す助詞には-テ（て）、-デ（で）、-サカイ（ので、から）が3地点でよく使われるほか、丁寧な場面では長浜や米原で京阪系の-ヨツテ（ニ）もかなり使われる。-デはアタマガ イタイデ オキラレン（頭が痛くて起きられない）<高月>、ウルサイデ アツチエ イキ（うるさいからあっちへ行きなさい）のごとき使い方もある。

4) 文末詞

普通の疑問に-カ、-ノ、-ノン、-ノンカ、-ンカが、強い疑問に-ノンカ、-ンカ、-ノヤ、-ンヤが、疑問念押しには-カイがよく使われる。-ノンカ・-ンカは京都市方言系の形式で、3方言のいずれにも現れる。-ノヤは長浜に、-ンヤは高月・米原に多い。-ケは現れなかった。

強い断定に-ゾ・-ジョ・-ド（ぞ）、-シ（ぜ）のほか大阪方言系の-ガナ・-ガネ・-ガエが観察された。-ジョ・-シや-ガネは高月で安定しているが、長浜では劣勢。-ガナは高月と米原で、-ガエは米原で安定。長浜市神照や高月では、男性が-ワイを結構使っている。

軽い断定念押しには共通語的な-ヨや-ワヨをはじめ、-ワナ、集落によっては-ガナ・-ガエも

使われ、これに強い親愛の念が加わる場面では-ホンが使われる。この-ホンは、湖北、湖東、湖西の高島郡の一部にまで分布している。

5) 勧誘

イッショニ カコマイカ（一緒に書こうよ）、ハヨ イコマイカ（早く行こうよ）の-マイカが3方言でみられる。-マイカ系の分布はかなり広く、これまでの調査報告⁷⁾によれば、京都方言に「書コオマイカ」、越前若狭方言に「書コマイカ」、富山県方言に「イコマイケ」（行）「タバマイケ」（食）「カカンマイケ」（書）⁸⁾など、新潟県方言には「イッパイ ヤルマイカ」「行コマイカ」あるいは「行クマカイヤ」「オキマカイヤ」⁹⁾、愛知・岐阜・静岡にも「イコマイカ、イクマイカ」がみられる。

6 代 名 詞

3方言では使用語形や待遇度などに若干の地域差があるが、ウチ、ウラ、ワイラ、アンタハンをはじめ近畿方言色が強い。紙幅の関係で語形のみを以下に示す。

自称 ワシ、オレ、ウラ<稀>、ウチ、ワタシ、ジブン、ボク<稀>、ワシラ、ウチラ、ワタシラ、ジブンラ、ボクラ<稀>、ワタシドモ……

対称 オマエ、テマエ、オヌシ、アンタ、アンタハン、アナタ、オマエサン、オタク、オタクサン、オノレ、キサマ、オマエラ、テマエラ、ワイラ<稀>、アンタラ、オマハンラ、オマエサンラ、アンタハンラ、アナタガタ、アナタタチ、オノレラ、キサマラ……

他称 アイツ、オヌシ<稀>

7 ま と め

湖北方言の文法は、近畿方言のそれを基盤とし、滋賀県諸方言の中では近畿周辺方言の性格を強くもつ。しかし、その周辺色は南近畿方言ほどには強くない。たとえば(a)二段活用がなく、(b)「見る」「起きる」類の五段化もみられない。また、(c)待遇表現体系も助詞待遇ではなくて補助動詞・助動詞を中心とする層の厚い待遇体系を有するなど、全般的には近畿中央部、とくに京都市方言との共通面の多い文法体系といってよい。

長浜市方言には湖北方言の文法事象のほとんどが顕著に現れるほか、待遇表現の一部、文末詞、人代名詞などに独得の新しい変化もうかがえる。周辺方言色の強い特徴、湖北方言らしい特徴は次のとおり。

- (1) 五段動詞の一部が-タ・-テなどに接続するとき、ケァータ（書いた）、ネァータ（泣いた）

となる現象がみられる。

- (2) やさしい命令に-ナイ, 親愛命令に-ヤイ・-イヤが使われる。-ナイは, 尊敬を表す-ナハルの命令形の変化形で, 助動詞の連用形に接続する。-ヤ・-イヤは, 同等以下の相手に強い親しみをこめてやさしく命令する時に使う。
- (3) 勧誘を表す-マイカの使用が安定している。
- (4) 尊敬の-ハル・-ヤハルの訛音形である-アル・-ヤール・-アールがある。-ハルが-ハール, -ヤハルが-ヤハールと半長音化することもある。新しい変化形である。文語形の-ラルも残存する。
- (5) -レル・-ラレルの特殊用法がある。これは(a)話し手と聞き手との間の改まった感じと同時に(b)話中の人物との間の親密な感じを表すとされてきた用法。湖北ではもともと稀, 湖東の南部でよく用いられる。
- (6) 親愛を表す-ヤス・-ヤンス・-ンスがある。聞き手または話中の人物が話し手と同等以下の場合に, 親しみをこめていうときに用いる。
- (7) 丁寧な依頼表現に-クダイ・-オクナエ [okunae] を用いる。湖北方言の伝統的な形式の一つだが, 最近はほとんど聞かなくなった。
- (8) 伝聞の-ホナ・-ゲナがある。
- (9) 湖東・湖西へと分布の続く-トサイガがある。
- (10) 湖東方言にもみられる-ホンがある。強い親しみをこめた軽い断定念押しに多く用いる。湖東や湖北一般に広く用いられる用法のほかに, ヨー ミエルホン ハヨ コイヤ (よく見えるぞ, 早く来いよ)のごとく, 共通語の「ぞ」に近い強調念押しにも用いる。

以上, 周辺方言色の強い事象を列挙したが, この一方で近畿中央方言との共通点も多く認められる。(1)動詞サ行イ音便が目立たない, (2)一段動詞の五段化や二段活用の残存がみられない, (3)丁寧のオマス・オス, 形容詞のエー(良い)・ナイ(無)が特殊に活用する, (4)動詞・形容詞のウ音便が盛んである, (5)打消に-ン・-セン・-ヘン・-ヤセン・-ヤヘンを用いる, (6)-ヨルが卑語化している——などの諸点がそれである。

高月町方言・米原町方言の文法体系は, 長浜方言のそれとかなり類似し, 訛音形, 待遇表現, 文末形式の一部などにいくつか重要な差異がみられる程度である。主な特徴は, 次のとおり。

- (1) やさしい命令にキナイ・ゴンセ(来なさい)のようないい方がある。
- (2) 形容動詞の-ジャ語尾は, ほとんど使われない。
- (3) これまで伊香郡を除く湖北方言の現象とされてきた-アル・-ヤール・-アールが, 伊香郡高月町にもある(大字熊野など)。
- (4) 米原町榑ヶ畑方言に尊敬の-ヤルの使用が認められる。
- (5) 同方言に文語系の-ラルが残存する。また, ミテタモタ(見てくださった), ミテクダシカ

レ(見てください), オカシ タイナ(お菓子をちょうだいな), ソレコサレ(そのことだよ, 注意したとおりでらう!)などの古い用法が残る。

なお, お忙しい中ご教示くださった話者は次の方々である(年齢は昭和54年調査時の満年齢)。記して感謝申し上げる次第である。

平塚 健造氏(長浜市宮前町, 市社会教育委員, 69才)

小倉 愛子氏(同神照町, 主婦, 50才)

月ヶ瀬清一氏(同新庄寺町, 庭園業, 74才)

清水 利一氏(同掘部町, 農業, 85才)

塚原 甚一氏(同東上坂町, 農業, 75才)

宮戸勝三郎氏(同加納町, 元教諭, 62才)

清水 昭蔵氏(同八条町, 農業, 53才)

丸山 外雄氏(伊香郡高月町馬上, 農業, 73才)

大橋 常三氏(同雨森, 農業, 74才)

山本よしの氏(同熊野, 農業, 70才)

天守 正芳氏(同雨森, 僧侶, 55才)

近藤 義雄氏(坂田郡米原町樽ヶ畑, 農業, 81才)

川口 敏雄氏(同, 農業, 79才)

注

- 1) 地域差の記述は, 井之口有一『滋賀県言語の調査と対策』, 箕大城「滋賀県方言」(『近畿方言の総合的研究』), 藤谷一海『滋賀県方言調査』に詳しい。
- 2) 「言う」は語幹交替して 'ju-_E ともなる。
- 3) オスはオセン 'os-e-_N (第1形), オシタ 'os-i-ta (第3形), オス 'os-u (第4形)に活用が限定される。ワスも活用形がきわめて限られる。
- 4) 音声的に [kɛ:ta~kæ:ta] (書), [nɛ:ta~næ:ta] (泣) のように [ɛ] や [æ] が現れるが, /e/ と認められるものではない。十津川村方言のような [ka:ta] (書), [na:ta] (泣) といったきれいな[a]ではないが, 音声的な現象としての [ɛ] [æ] として扱い, ア音便と仮称しておく。
- 5) オモウ(思)・ヒロウ(捨)の類は, ウ音便と短音便の併用がみられる。
- 6) サ変には, 受身表現でも-レルと-ラレルの両形が下接する。
- 7) 『方言学講座』3, NHK『全国方言資料』3, 『新日本語講座』2・3, 『ことばとくらし』4など。
- 8) 『新日本語講座』3巻171頁に「越中東部などに見られる書カンマイケのンは打消ではなく, 意志と考えるべきでしょうか」とある。
- 9) -マカイヤは, 巻中学校『方言蒐輯録』(大正15年)による。